

〈形而上学に入り来った神〉もしくは〈形而上学から退去する神〉？
——マルティン・ハイデガーの「存在の思惟」とマイスター・エックハルト
の根本テーゼ „Esse est Deus（存在は神である）“——

長町裕司

「野の道の周辺に滞留する、自然に発生し成長したあらゆる物の広大さが、世界を恵み授ける。読むことと生きることの老巨匠、エックハルトが言うように、その世界の言葉の語ろうとして語られなかったものにおいて、神ははじめて神なのである」（„Die Weite aller gewachsenen Dinge, die um den Feldweg verweilen, spendet Welt. Im Ungesprochenen ihrer Sprache ist, wie der alte Lese- und Lebemeister Eckehardt sagt, Gott erst Gott.“: Martin Heidegger, Der Feldweg (1949, in: ders., Aus der Erfahrung des Denkens ; ders., Gesamtausgabe 13, S.89)

本発表の前半部は専ら、ハイデガーが「形而上学の存在 - 神 - 論的体制」として特徴づけるいかなる構成契機(vgl. Martin Heidegger, Die onto-theo-logische Verfassung der Metaphysik, in: ders., Identität und Differenz , GA 11, S.76f.)からも、エックハルトの存在理解の彫琢と共に表明される神思想は全く離脱するものであることを解明することに向けられる。ドイツ神秘思想の定礎とその後の長い射程での濃厚な影響作用史の基点となったマイスター エックハルト (ca. 1260-1328) は、『三部作への序文 (Prologi in opus tripartitum)』によって、彼の全ラテン語著作と思想内実の統一的なプログラム綱領を遺している。『三部作』の三部分は、相互に関連する全面的に規定された関係を有するはずのものであったのだが、その最初の部分『提題・命題集 (Opus propositionum)』、即ち形而上学に取り置かれた部分は、それに続く『問題集 (Opus quaestionum)』及び『註解集 (Opus expositionum)』のための土台として予定されていた。その最初の部分に先立って『三部作への全般的序文 (Prologus generalis in opus tripartitum)』において既に表明される根本命題「存在は神である („Esse est Deus“)」は、『提題・命題集 (Opus propositionum)』の第一命題として、最初の問題 (quaestio) 及び註解事項 (expositio) へと本質関連するのみならず、エックハルトの (ドイツ語諸説教および諸論考も含めての) 哲学的小および聖書神学的全著作解明の鍵となる基盤テーゼ (Basisthese) として定式化されている。13世紀ラテン中世のスコラ学的遺産として、多くのキリスト教思想家と共通してエックハルト自身の幾つかのテキストにも散見される „Deus est esse“という通常の言明から逆転して „Esse est Deus“と定式化されるこの基盤テーゼは、「神の名」の聖書的啓示の哲学的開明からも裏づけられることによって、むしろ (「存在 - 神 - 論」とは由来を異にする) 〈神 - 存在 - 論的 (theo-onto-logisch)〉な思惟の体制の

準拠となるのである。

以上の帰結を受けて後半部では、a) いわゆる『ナトルプ報告』(Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles. Anzeige der hermeneutischen Situation, 1923)以来ハイデガーが明示的に表明する「無 - 神論としての哲学の中立性」(ebd. in: Dilthey-Jahrbuch Bd.6, hrsg. F. Rodi, Göttingen 1989, S.235-269, S.246)が存在の問いを問い抜く究明において如何なる位置を有するかという問題から始めて、b)「どのように神は哲学の内へ来たるのか」という詰問と共に、西洋の伝統的形而上学がその根幹において有するとされる存在 - 神 - 論的体制(初出は、1930/31年冬学期講義『ヘーゲルの「精神現象学」』GA 32, S.183)の剔出に至るハイデガーの思索の道をマールブルク時代後期(1928年)からのいわゆる「形而上学期」へと遡って1930年代前半まで跡づけたい。その上で、c)中期以降でのハイデガーの脱 - 形而上学的(従って、脱 - 存在 - 神 - 論的)〈存在の思惟〉がそれにもかかわらず、「神の問題」を巡ってエックハルトの神思想の思索と如何なる地点で決定的な歴史的対 - 決に立つのかの究明に着手する。